

Title	生産経済思想史概観
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1943
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.37, No.4 (1943. 4) ,p.265(1)- 310(46)
JaLC DOI	10.14991/001.19430401-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19430401-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19430401-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

東京大學教授 加田 哲二 著

# 日本經濟新論

B 6 四〇六頁  
口 繪 八 頁  
賣價 二圓七〇錢  
送料 二〇錢

## 前篇 近代日本の經濟的發展

全國民の旺盛なる敢闘精神と、優秀なる兵器と、長期戦に耐へ得る經濟力とを戦争に勝ち抜く爲の三要件とすれば、經濟力の高度の組織化こそは我が當面の根本的な課題である。本書はこの使命に應へんが爲に、我が經濟の全體的な理解を目指して先づ近代經濟の一般的傾向を取上げ、次で日本經濟の近代的發展を説く。維新以後昭和初期に至る發展史……事象の流れを求め、本質を把握し、そして現代の理解に至る大略が茲に拓かれたのである。

### 目要容内

第一部、近代經濟の本質 基本社會と經濟……經濟社會の發展……近代の經濟……現代の經濟的傾向……  
第二部、近代日本の經濟的發展 序論……日本社會の特質……新經濟への基礎工作……明治十年代の經濟……日清戦争時代の經濟状態……日露戦争時代の經濟状態……歐洲大戦當時の日本經濟……世界大戦後の經濟……恐慌生産組織の高度化……資本の集中と財閥……附録、参考文献

慶應出版社

東京市芝区二丁目一

電話三田(45)二七一  
振替東京一五八〇一

## 三田學會雜誌

第三十七卷

第四號

### 生産經濟思想史概観

高橋 誠一 郎

「經濟學者が生産的及び不生産的なる語に關してよりも、彼れ等が其の適當なる用法に就いて見解を異にした如何なる兩語をも指摘するは恐らく困難であらう。(労働、消費若しくは經費の孰れに適用せられるものと考へられたにせよ)」とジョン・スチュアート・ミルは其の『經濟學未決定問題』中の第三論文『生産的及び不生産的なる語に就いて』の中に於いて述べてゐる。(Essays on Some Unsettled Questions of Political Economy, 1844, p. 75.) 此のミルの論文は一千八百二十九年乃至三十年の頃に書かれたものであるが、是れよりして凡そ六十年の後、アルフレッド・マインシャルは其の『經濟原論』中に於いて、「事實上何等眞實の分離も存することのない所に、峻烈にして確固たる分界線を畫さうとする企圖は、往々にして此の生産的なる名辭に與へられて來た嚴格なる定義以上に弊害を來したること

産經濟思想史概観

(二六五)

は屢々であつたが、而も、恐らくは是れ以上に奇異なる結果を導いたものは曾つてなかつたであらう」と説き、而して、其の中の或るものは、例へば、歌劇の歌手は不生産的であり、其の歌劇の入場券の印刷者は生産的であるが、而も、人々に其の座席を教へる案内人は偶々番附を賣ることがなかつたならば不生産的であり、又、之れを賣つたならば、生産的であると云ふ結論に到達すると做して、M. G. (Principles of Economics, vol. I, 1890, pp. 119-120.) 而して、彼れは、其の著の後版に於いては、是れ等の所言に對して、「生産的なる語が使用せられる總べての特性は甚だ稀薄であり、且つ幾分不眞實の態を有するものである。現在に於いて是れ等のものを導入するの價値は殆んどないであらうが、而も、是れ等のものは長い歴史を有するものであつて、之れを急激に排斥するよりも、寧ろ漸次其の使用を減少するを以つて、恐らくは優れりとするであらう」と前置してゐる。(Ibid., 5th ed., 1907, p. 67.) 洵に、生産的及び不生産的なる語は今日に於いては寧ろ廢滅に歸せしむるに如かざるものであるかも知らぬ。然しながら、久しきに亙つた此の語の歴史は又之れと關聯せる一般經濟思想變遷の跡を指示するに役立つ所なしとしな

## 二

古代社會に於いては、純乎たる經濟的見地よりして生産的及び不生産的勞働を區別するよりも、寧ろ、政治的、軍事的及び社會倫理的觀點より高貴なる業務と賤劣なる業務とを區別して居つた。(昭和四年版拙著「經濟學前史」一四八一—一九〇頁參照)。中世に於いては、主として如何なる職業が最も多く神の嘉納する所となるかと云々せられた。「第十四世紀最大なる佛蘭西經濟學者」ニコール・オレームの如きも、自然的富を取得し、祈禱祈願を捧げ、司法事務を行ふ牧師、修道士、判事、軍人、商人、農夫、工匠等の如きは、國家全體に取つて有用なる正しい業務に従

事しつゝあるものと觀て居つた。(前掲拙著五〇七頁)。第十五世紀末に於けるグレゴリウス・トロサノス (Petrus Gregorius Tolosanus) の種々なる社會階級及び職業に關する教義の如きも、富の増加に及ぼす其の影響よりも寧ろ其の品位に關するものであつた。(De Republica, I, 195.)

近世初期に至り、富に關する新觀念を生ずると共に、それは臆がて生産に關する態度にも反映することゝなつた。近世國家の興起は新たな見地より富を考察するに至らしめた。國家的目的を達成するの手段として富の生産及び蓄積は論述せらるゝに至り、比較的永續性を有し、蓄積可能なる物件を特に尊重するの風を誘致することゝなつた。斯くて、重商主義者は、永續不滅にして最も蓄積に適する財貨たる金銀を以つて他に類例のない富と看做し、之れと交換に輸出せられる財貨の生産に充てられることのない總べての勞働を不生産的若しくは不胎と考へる傾向があつた。クレメント・アームストロングは、總べての人工品の職人は必然貨幣を目的として勞作す可きことを説き、(『社會經濟史學』第十卷第四號所載拙稿「英國重商主義の商人主義的性質」二頁參照)、又「種々なる人々の有する目下の不平の簡略なる檢討」の著者は、最も多量の貨幣並びに財寶を國內に誘致す可き職業を優遇し愛撫す可きことを説いた。(昭和十五年版拙著「重商主義經濟學研究」五五頁參照)。而して、多く永續性に乏しい不必要品を輸入するが爲めに自國の地金銀及び鑄貨を枯渴せしむるものとして一般の非難を浴びて立つた東印度貿易商人は、同貿易が自國の財寶即ち貨幣を増加す可き最良の手段たることを論争しなければならなかつた。(前掲拙著一〇六一—〇九頁參照)。サー・ウィリアム・ペチは、貿易窮極の大成果を以つて、富の全般ではなくして、而も特に消滅し得可く又他の貨物の如く變じ易いものでもなく、如何なる時、如何なる場所に於いても富たる可き銀、金及び珠玉の豊富なるに在ると做した。(同書二八、二九四、七七八—七七九頁參照)。

常に強大なる國家を渴仰して止まなかつたペチイは、全然政治的見地に基いて、永續的財貨の生産に使用せらるる労働に對して特殊の優越を認めたのであるが、而も、彼れは、他方に於いて、國民の富が其の過去の労働の結果であることを認めて居つた。彼れを以つて觀れば、國家の安固は其の富に依存し、富は又生産的労働に依存するが故に、國家的政策は其の臣民をして最大なる利益に向つて彼れ等の活力を發動せしむるを目的として指導せられなければならぬと思惟した。斯くて、彼れはあらゆる無益の労働を阻止しようとした。彼れは教育制度を國家的支配の下に置き、適材を選抜して適宜の教育を施さんことを期した。彼れに従へば、無益なる問題の攻究を旨とした教育は、單なる空想的生涯の準備たるに過ぎないものであつて、従つて、實に無用であるばかりでなく、又、有害なるものである。諸般の高等職業に志す者の數は、是れ等の職業に對する必要を減殺するに由つて、之れを制限しなければならぬ。其の労働は何物をも生産することなきが故に、其の所得は恰も賭博者の其れと異なることのない階級の人々を減少せしめるが爲めに、法律制度は其の總べての部局に於いて之れを簡易ならしめなければならぬ。彼れは又、租税制度の全般が生産業を鼓舞するを以つて主眼としなければならぬと觀た。不生産的階級は最大なる負擔を課せらる可きものである。彼れ等の資産は其の所有者を變ずるに由つてのみ唯り生産的のものとなり得可きである。富と財産とは地主及び怠惰なる者から移して、精練且つ勤勉なる者に歸せしめられなければならぬ。(同書二八、二九四、七七九、七九三—七九五頁)。實に結構な食物、衣裳、家具、住宅、樂しい庭園、果樹園及び公共の建築物等によつて、其の居住する國を美化するばかりでなく、貿易と武力とによつて其の國の金、銀及び珠玉を増加しつゝある勤勉にして伶俐なる人々の資財が租税によつて減少せしめられ、而して食ひ且つ飲み、歌ひ、奏し、又、踊るの外、全然何事をもなすことのない底の者に、否、形而上學若しくは其の他の無用なる思辨を研究するか、然ら

ざるも亦、何等物質的の物件若しくは國家に於いて眞の效用と價值とを有する物件を生産することのないあらゆる他の仕事に従事する底の者に移さる可しとしたならば、社會の富は減少するであらう。(Political Arithmetick, 1690, p. 38)。斯くて、ペチイは後年の生産的及び不生産的労働論の先驅をなした。彼れは又、人口稠密の經濟的利益を擧示し、後世の分業論に對して示唆を與ふる所が大であつた。(前掲拙著七九一頁參照)。

バックスター (Richard Baxter) の如き宗教家は、流石に、職業の選擇に際して意圖せらる可き第一主要事を、神への奉仕と公共の福利に置き、而して、公共の福利に資する所最も大なる職業を以つて、長官、教會の牧師及び説教師、教員、醫師、法曹及び農夫(耕作者、牧牛者及び牧羊者)なりと做し、之れに次ぐ者を、海員、機屋、書肆、仕立屋及び其の他人類に最も必要なる諸物に就いて作業しつゝある者と觀、而して、煙草商、レース商、羽根細工匠、鑿匠其の他を以つて、殆んど何等の效用をも有せざるものに就いて作業するものであつて、恐らく、其れ自體に於いては合法たり得るであらうが、而も須らく之れに關與することを嫌忌す可きものとなして居つた點に於いて、猶ほ中世的思想を保持すること多きを想はしむるものがあつた。(A Christian Directory: Or a Summ. of Practical Theologie, and Cases of Conscience, 1673, p. 449)。而も、彼れは、又、專業の經濟的利益を列擧するを怠らざるものであつた。即ち第一は、労働の永續不斷、第二は、最もよく熟練を得せしむること、第三は、最もよく用具及び必需品を備へらるること、第四は、人は他の仕事を爲すを得るよりも、より、良く之れを爲すこと、第五は、より、容易に之れを爲すこと、第六は、より、整然と其の仕事を行ふであらうことが是れである。(Ibid.)。而して、後れ、ハリス (Joseph Harris) も亦、人類が各自別箇の職業に従事するに由つて彼れ等に對して生ずる利益が甚だ大であり且つ顯然たるものあることを擧示して居つた。(An Essay upon Money and Coins, Part I, 1757, pp. 16-18)。

獨逸に於いては、第十八世紀の初葉に於いて、重商主義的生産及び不生産階級の區別が極めて明確にヨハン・ライプ (Johann Georg Leib) によつて表明せられた。即ち彼れは、「最大なる原理」を以つて、「國內に貨幣を保持し、而して他國より之れを誘致するに」在りと觀、(Von Verbesserung Land und Leuten, und wie ein Regent seine Macht und Ansehen erheben könne, 1708, I, Vorrede) 而して、「一國の人口を公共に取つて榮養力ある階級 (nahrhafte Stand) と榮養力なき階級とに分ち、朝臣、貴族、官吏、辯護士、兵士、怠惰者は第二の階級に、農民、手工業者及び商人は第一の階級に屬するものと做し、而して、農、工、商の如きすらも、上記の指導原理に一致する限りに於いてのみ然るものであると説いて居つた。(Ib., I, 7 ff.)」

## 三

此の時代に於いて生産要素論は或る程度まで發達を見た。前述せるペチイは又、ホップズ、フォートリイ及びグラント等と同じく、勞働が國富の父たるに等しく、土地が其の母であることを認めた。(前掲拙著七七―七七二頁参照)。洵に當時の一般思想は土地及び勞働の兩者を以つて生産に取つて缺く可らざる二要素と做すに在つた。

カンチロンも亦、這般の思想を傳へて、其の『商業一般の本質論』の劈頭に於いて「土地は當さに富の抽出せらる可き根源若しくは資料である、而も、人間の勞働は之れを生産するの形態である」と論じた。(Essai sur la Nature du Commerce en général, 1755, p. 39.) 而も、彼れは其の後に於いて資本を生産の二要素と看做した。人間の勞働によつて援助せられて、土地は自然に、土壤の沃度と住民の勤勉に従つて、其の上に蒔かれた小麥の高的四倍、十倍、二十倍、五十倍、百倍、百五十倍を産する。そは收穫と家畜とを増加する。其の作業を管理する小作人は概して其の收益の三分の二を取得し、三分の一は彼れの經費及び給養費を支拂ひ、他は彼れの企業の利潤 (profit de

son entreprise) として殘存する。小作人にして若し彼れの企業を續行するに充分なる資本を有したならば、彼れにして若し必要なる道具及び用具、耕作用の馬匹、土地をして作付地たらしむる家畜其他を有したならば、彼れは總べての經費を支拂つて後、彼れの農場の産物の三分の一を自ら取得す可きである。然しながら、連日其の賃銀を以つて生活し、而して何等の資本をも有することのない伶俐なる勞働者が、彼れに土地若しくは之れを購入するが爲めの貨幣を貸與せんとしつゝある或る者を看出すことが出来るならば、第三の所得 (rente) の全部、即ち彼れが其の小作人若しくは企業者 (entrepreneur) となる可き農場の産物の三分の一を貸主に與ふことを得可きである。(Ibid., p. 205-207.) 然しながら、他方に於いて、カンチロンは、君主及び土地の所有者の外、何者と雖も獨立に生活するものなく、總べての他の階級及び住民は給料を受くるものであるか、企業者であるかであると觀た。而して、若し土地の所有者にして其の財産を閉鎖し、何人も土地の上に勞働することを許すことがないとしたならば、毫も利用し得可き食料又は衣料の存在を見ることがないであらう。従つて、カンチロンは、或る意味に於いては、一國のあらゆる住民は悉く皆、地主に依存するものと思惟した。然しながら、地主自身も亦、生存の資料を要するが故に、彼れ自ら其の土地を耕作するか、若しくは之れを農夫に貸與するの舉に出づ可きである。カンチロンは、斯くの如き場合に、農夫は普通土地産物の約三分の一を土地の使用に對する報酬として地主に支拂ひ、他の三分の一を其の企業の利潤として自己の爲めに保留し、而して殘餘を以つて賃銀及び耕作の諸費用を支拂ふものと觀る。而して、地主及び農民は其の生産物に對して得た分前の一部を直接農業に参加することのなかつた都市に於ける製造業者、企業者及び其の産物を地方より都市に搬ぶ輸送業者其他の社會の人々に由つて供給せられた勤務及び貨物に對して消費するのである。斯くの如くして、一國の土地及び勞働の年産額は社會を通じて循環するの結果とな

るのである。(ibid., p. 55-57.)

此のカンチロンの著書によつて影響せらるゝことの多大であつた重農學派は、農業家の労働のみ唯り蓄積せられた富の純餘剰を其の背後に残存せしむるの故を以つて、彼れ等を唯一の生産的労働者と看做した。而して、彼れ等は、其の生産せる所のものと等しい價值を消費する總べての労働を以つて不生産的と思惟したのである。即ち、彼れ等に在つては、生産は生計の資以上に餘剰を生ぜしむるを意味するものであつて、生計其の者は排除せらる。彼れ等に從へば、土地の所有者及び耕作者の労働は、人生の目的に有用なる原料の貯へを増加するが故に生産的であるが、製造業者、技工及び商人の其れは、兩生産階級の餘剰物から維持せられるが故に不生産的である。彼れ等を以つて觀れば、一製造品の價値は原料の品質に依存するものであつて、原産物以上に出でたる精製品の價値の優越は唯り労働者支持の費用を償ふに資するに過ぎない、若し夫れ、商業に至つては、單に現存の富を一の場所から他に移動するに過ぎざるものである。斯くて、此の學派の始祖フランス・ケネーは、其の一千七百五十八年の『農業王國經濟行政の一般格言』(Maximes générales du gouvernement économique d'un royaume agricole et notes sur ces maximes.)の第三格言中に於て、「主權者並びに國民をして常に、土地は富の唯一の根源であり、而して之れを増加せしむるものは農業であると云ふ事實を忘却せしめてはならぬ。蓋し、富の増加は人口の増殖を確保し、人民並びに富は農業を繁榮ならしめ、商業を擴張し、製造業を鼓舞し、而して更らに富を増加せしめ、且つ之れを永續せしむ可きが故である」と。(Œuvres économiques et philosophiques de F. Quesnay, par Auguste Oncken, 1888, p. 331.)

チャルゴオも亦、農業労働者は其の労働が労働の賃銀以上に生産する唯一のものであり、斯くて彼れは總べての

富の唯一の源泉であると説く。(Réflexions sur la formation et la distribution des richesses, 1766, § vii; Œuvres de Turgot, par Gustave Schelle, Tome II, 1914, p. 538.) 彼れは這般の基礎の上に、先づ社會が二階級に分たれることを説く。第一は生産者 (productrice) 即ち耕作者の其れであり、第二は被備的 (suspensée) 即ち工匠の其れである。(ibid., § viii; p. 538.) 最初の時代に於ては、地主は耕作者から區別せられなかつたが、(ibid., § ix; p. 539.) 繼がて、土地所有の不平等を由り、耕作者は地主から區別せられることとなる。(ibid., § xiii; p. 541.) 社會は新たに生産的階級、被備者階級及び隨意に使用し得る階級の三つに分たれる。此の第三の階級は即ち地主 (propriétaires) の其れであつて、生計の必要に驅られて特殊の労働に結び付けらるゝことなきを以つて、戦争及び司法行政の如き、社會の一般的必要に對して、自己の勤務によるか、若しくは國家又は社會が是れ等の職能を遂行す可き人々を雇傭し得る彼れ等の収入の一部の支拂によつて、使用せられ得るものである。斯くて、それは隨意に使用し得る階級 (classe disponible) と稱せられる。(ibid., § xv; p. 541-542.) 次いで、チャルゴオは前記二個の労働階級即ち隨意に使用し得る階級間の類似を述べたる後、其の根本的相違を擧示し、耕作者の労働は彼れ自身の賃銀並びに其の外に全工匠及び其の他の被備階級に賃銀を支拂ふに資する収入を生産するのであるが、之れに反し、工匠は單に彼れ等の賃銀、即ち彼れ等の労働と交換に土地收益の彼れ等の配分を收受するに過ぎずして、何等の収入をも生産することのないものであると做した。(ibid., § xvii; p. 542.) 是に於て乎、隨意に使用し得る兩階級は、耕作者の階級たる生産者の其れと其の社會の總べての他の被備成員を包含する不胎 (sterile) 階級とに區別し得られる。(ibid., § xviii; p. 543.)

重商主義時代に於て既にアントニオ・セルラは土地收益遞減法則の作用を認めたと言はれてゐるが、チャルゴオ

に至つて殊に明かに土地に關する收益の増加が投費の増加と平行すること能はざるの事實が表明せられた。一千七百六十五年九月以來、デュ・ポン・ツ・ヌムール (Dupont de Nemours) の主宰せる *Journal de l'Agriculture du Commerce, et des Finances* の寄稿家の一人であり、小説、喜劇並びに社會及び經濟問題に關する著者であつたジャン・ニコラン (Jean Nicholas Marcelin Guérineau de Saint Pérary) が、一千七百六十七年、チュルゴオの意見に據つて、リモーチエの王立農業協會 (Société Royale d'Agriculture) が間接税の轉嫁に關する論文を懸賞募集せる時、重農學派の純收益論並びに彼れ等が是れより演繹して課税に適用せる推論に對する堅實なる反對者であつたナムトの收稅吏グラスマン (Louis François de Grassin) の *Sur l'influence de l'impôt indirect sur les biens fonds* と争つて當選した受賞論文 (此の論文は其の翌六十八年 *Mémoire sur les effets de l'impôt indirect sur le revenu des propriétaires de biens-fonds, qui a remporté le prix proposé par la société royale d'agriculture de Limoges en 1767* の題下に出版せられてゐる) に對して、チュルゴオは六十七年の頃 *Observations sur la mémoire de M. Saint Pérary* を草したのであるが、其の中に於て彼れは下の如くに述べてゐる。(因に記す、グラスマンは單に褒賞 (mention très honorable) を授けられたに過ぎないが、チュルゴオは之れに對しても亦 *Mémoire* を草してゐる)。普通の良耕作状態に於ては、年々の前拂が百に對し二百五十を齎すことを假りて此の *Mémoire* の著者に許すとしても、斯くの如き前拂が次第に増加して、這般の點、即ち百に對する二百五十を齎す點から是れ等のものが何物をも齎すことなかる可き點に到達したとするならば、各増加量が愈々益々收果少なかる可きことは蓋然的以上である。斯くの如き場合には、大地の沃度は、順次に同一重量を荷はしむるによつて緊張せしめられる彈機の如きであらう。其の重量が軽く、又其の彈機が甚しく柔軟でないならば、最初の積載の影響は殆んど皆無であらう。其

の重量が最初の抵抗に打ち勝つに足るものとなつた時、其の彈機は目立つほど屈服し、而して撓むことが認められる。然しながら、其れが或る一定の點まで撓んだ時には、そは其の上に迫るやうに齎された力に對するより、大なる抵抗を顯すであらう。而して、之れを一プース撓めたであらう所の重量は最早半リニユ (一リニユは一プースの十二分の一) 以上撓めることがないであらう。其の作用は斯くて愈々益々減少する。這般の比較は完全に精確ではない。然しながら、土壤が其の生産することの出來る總べてを齎すに極めて近くなつたならば、頗る大なる費用が甚だ僅かに生産を増大す可きことを示すに足るものがある。前拂が其の最大なる收益を與ふる點を超えて同一の程度づゝ増加せしめらるゝことなく、其の反對に是れ等のものが減少せしめらるゝとしたならば、比率に於ける同一の變化が看出されるであらう。甚小なる前拂が利潤を與ふることは甚大なる前拂よりも遙かに小なる可きこと及び前拂の其れよりも遙かに小なる比率に於いてである可きことが、嘗だに明かに想像せられ得るばかりでなく確實である。二千フランが五千リヴルの收益を與へるならば、一千フランは恐らく一千五百の收益を與へることなかる可く、又五百フランは六百を與ふることなかる可きであらう。天然に豊沃ではあるが、而も何等の地均しも行はれてゐない土壤の上に蒔かれた種子は殆んど全く空費せられた前拂であらう。そが一度び耕されたならば、收穫はより大なる可く、再び三度び耕作せられたならば、收穫を唯り二倍及び三倍に増加するに止らないで、四倍若しくは十倍に増加す可きである。斯くの如くしてそは前拂が増加するよりも著しく大なる比率に於いて増加し、而して、終には、收穫が前拂と比較して最大可能なる一定點に到達す可きであらう。此の點を越して、前拂が尙ほ増加したならば、收穫は尙ほ増加す可きも、而も其の増加はより少なかる可く、而して、遂には大地の產出力が枯渴するに至る迄絶えず益々減少す可きであらう。而して、技術が何物かを加へることを得ないならば、前拂に對する附加は收穫に對

して全然何物をも加ふることなかる可きである。余は前拂が最大可能なる収益を擧ぐる點を以つて耕作者が到達し得る最も有利なる點であると想像するは誤謬であると観る。蓋し、新たな前拂が先きの前拂の與へたと恰度同じだけの収益を與へることがないにせよ、若し是れ等のものが土壤の純収益を増大するに足る收穫を與へるならば、是れ等のものを投入することが有利であるからである」云々。(Chevres, op. cit., p. 644-645.)

洵に、チュールゴオは、土地の一定量の上に資本の投入を増加し行く時は、あらゆる投資は、早晚、適用せらるゝ各單位に對する収益を遞減するの點に到達す可きことを認め、而して、農業者は、取得せらるゝ餘剰収益が投資と均衡するに至る迄、其の資本の投入を附加す可きことを説いたのである。斯くの如く、彼れは収益變化の原理を確實に把握し、而して、生産の一要素の供給が増加せらるゝことなく、他の可變的要素の投入が漸次増加せらるゝとしたならば、最大収益點が識別せらるゝと做すの法則を表明したのであるが、然しながら、這般の法則は生産の三要素、即ち土地、労働及び資本の總べてに就いて眞ではあるが、而も、資本及び労働の二者は、富及び人口の増加に連れて、其の供給を増加するの常であるに反し、土地の供給は一社會に於ける人口及び産業の發達と共に増加することなきが故に、其の實際的及び理論的結果は労働及び資本の場合と土地の其れとに在つては、同一の重要性を有するものに非ざることを看取して、後世の經濟學者の如く、製造工業の膨脹は、大體に於いて収益の遞増を誘起するに反し、農業的産業の膨脹は概して収益の遞減を誘起することを主張するには至らなかつたのである。而して、彼れ及び重農學派は、後の英國に於けるが如く、自國自ら所要の食料及び原料を生産するよりも、寧ろ其の利益の顯著なる場合には、其の力を工業に集中し、是れ等のものを購入するが爲めに工業製品を使用するに由つて其の富裕の程度を増加す可きものとは考ふることなく、却つて、農業に對して特殊の重要性を置き、農業者は其の生産費

及び其の生存費賃銀の外に地代の形態に於いて地主に對して支拂はるゝ餘剰を取得するものと思惟したのである。

而して、縱令ひ彼れ等が靜態的には土地収益遞減法則の作用を認めたとしても、而も彼れ等は農業技術の改良が此の法則の作用を免るゝを得せしむるのみならず、却つて土地の収益を遞増せしむ可きことを信じて居つたやうに見える。即ち、ケネーは、彼れが一千七百五十六年に『大百科全書』に寄せた項目『小作人』(Fermiers)中に於て、先づ精細なる知識を以つて、耕作用に馬若しくは牛を使用するの直接間接の利害を比較攻究し、牛を使用する小耕作 (petite culture) に對して、馬を使用する大耕作 (grande culture) の利益を主張したのであるが、更らに其の翌五十七年の『穀物』(Grains)に於ては、國內に於ける實際の穀物生産高を一箇年凡そ五億九千五百萬リツルに相當するものと計算し、(Chevres, op. cit., p. 206.) 而して、今、到る所に馬を使用して適當なる耕作を行つたならば、收穫は十八億一千五百萬リツル即ち凡そ三分の二を増加す可きことを説示した。(ibid., p. 213.) 而して、彼れに従へば、是れより總べての生産費を控除した後の餘剰は、従前の一億七千八百萬に對して、八億八千五百萬となり、約五分の四を増加す可きものと觀たのである。(ibid., p. 214.) 實に資本缺乏の爲めに萎縮せしめられて居つた佛蘭西農業の實情は斯くの如き主張に對して根據を與へたのである。

## 四

重農學派的意見は、曠がて農業が主要なる産業であり、商工業が主として農業家の所要物を供給する底のものであつた米國に流布するに至つた。ベンジャミン・フランクリン (Benjamin Franklin) は、重農學派の著作に動されて、一千七百六十九年、其の Positions to be Examined, concerning National Wealth. に於て、製造業を以つて不生産的なりと做す重農學派流の學說に従つた。即ち、彼れは、製造人は、其の労働に對して、衣料、燃料及び宿所



を包含する單なる生存費以上を雇主から取得することのなすものであると做した。(The Complete Works, in Philosophy, Politics, and Morals, of the late Dr. Benjamin Franklin, now first collected and arranged; with Memoirs of his early Life, written by himself, vol. ii, 1806, p. 409.) 彼れに従へば、一國內に製造品を有するの利益は、普通に想像せらるゝが如く、是れ等のものが其の形成せらるゝ原料品の價値を著しく引き上ぐるに存せずして、是れ等のものゝ形態に於いて、食料品がより、容易に外國市場に運搬せられ、而して、是れに依つて自國の商人がより、容易に外人を欺瞞するを得るに在る。彼れは、一國民に取り富を取得する方法が僅かに三つあるに過ぎざるの觀あるものと説いた。第一は羅馬人の行へるが如く、戰爭に依るものであつて、其の被征服隣邦を掠奪するに存する。斯くの如きは強奪である。第二は商業に依るものであつて、それは概して欺瞞である。第三は農業に依るものであつて、唯一の正直なる方法である。是れに在つては、人は其の無辜の生涯と其の有徳なる勤勞に對する報酬として、彼れの爲めに神の手によつて行はるゝ、持續的奇蹟の一種に於いて、地中に投入せられる種子の眞の増加を收受するものである。(Ibid., pp. 410-411.)

アダム・スミスも亦、重農主義的思想を或る程度迄承認し、「農業に於いては又、自然が人間と共に勞働する」云々と説いた。(Wealth of Nations, vol. i, 1776, p. 441.) 彼れは、重農主義が、細工人、製造人及び商人の階級を全然不妊且つ不生産的なりと説くの點に於いて、其の重大なる誤謬の存するの觀あるものと觀たのであるが、而も、借地農及び田園労働者の勞働が、商人、細工人及び製造人の其れよりも一層生産的であることは體かであると思惟したのである。(Ibid., vol. ii, p. 272.) 然しながら、生産的勞働と不生産的勞働の分界を劃す可き標準を、其の勞働が終つて後、少なくとも暫時持續する或る特殊の物品若しくは賣却し得可き貨物中に固定せられ體現せらるゝか

否か、略言すれば、其の產物が持續性を有するか否かに在りと觀た彼れは (Ibid., vol. i, pp. 400-401.) 細工人、製造人及び商人の勞働が、僕婢の其れと異なり、自から一定の賣却し得可き商品中に固定し且つ體現するが故に、是れを以つて生産的と看做さる可きものであると考へた。(Ibid., vol. ii, p. 273.) 斯くて、彼れは、借地農及び田園労働者は、鄙吝なくしては、細工人、製造人及び商人以上に、眞の收入、彼れ等の社會の土地及び勞働の年收益を何等増大することを得ざるものであると説かなければならなかつたのである。(Ibid., p. 275.) 加之、其の著の初めに於いて、勞働の生産力に於いて最大なる増進を來し、且つ勞働適用上に於いて大なる精練、技巧及び明察を得るは分勞の効果たるの觀があると説き、而して、分勞が、農業よりも、工業に對して、其の適用大なることを認め、而して、是れを以つて、纏がて農業の進歩遅々たる所以なりと論じたる彼れは (Ibid., vol. i, pp. 1, 8.) 茲に又、有用勞働の生産力に於ける改良が、第一には、勞作者の能力に於ける改良に、又、第二には、機械——彼れが是れを以つて勞作する——の其れに依存するものと觀、而して、細工人及び製造人の勞働は、それが借地農及び田園労働者の其れよりも一層小分せられ得るものであり、又各勞作者の勞働は其の作業を一層單純性大なるものたらしめらるゝが故に、著しく高き程度に於いて是れ等兩種の改良が等しく可能であることを認め、而して、是れに由つて、此の點に於いて、耕作者の階級は、細工人及び製造人の其れ以上に如何なる種類の利益をも有することを得ざるものであると論結しなければならなかつたのである。(Ibid., vol. ii, p. 275.)

而して、スミスは、其の大著の全卷を通じて、收益遞減法則を認めたる證據を残すことなく、又、穀物輸出獎勵金に對する彼れの強烈なる反對意見に奮激して之れが駁撃の筆を執り、之れに附帶して地代の發生原因を説明せるジェームズ・アンダーソンの如きも、單に土地の各部分が相異れる収益力を有するの事實に基く發生原因を説明す

るに止まり、土地に投入せられたる労働力及び資本が相異なる収益力を有するの事實に基く發生原因を説明することになつた。彼れは「収益の遞減を信することなく、却つて収益の無限の増加を信じた熱心なる農業家の一人であつた」と稱せられてゐる。(昭和十二年版拙著『經濟學史』上卷一六四—一六五頁参照)。

## 五

アンダーソンの郷國蘇蘭に於いては、地主對製造業者の軋轢は、英蘭に於けるよりも早く鮮明となつて居つた。英蘭で穀法問題が喧しく論争せられるやうになつたのは、一千八百十四年以後のことである。即ち、平和の回復、輸入の激増に搗て、加へて、大豊作の影響は、小麥の價格下落の勢ひを甚しからしめ、是れ迄概して冷靜の態度を保持して居つた地主階級を著しく狼狽せしめ、農業に對して更らに大なる保護を與ふるの可否が熱心に論議せらるゝこととなり、アンダーソンの死後六、七年にして、地代學説は再び、ジョン・ルーク、サー・エドワード・ウェスト、トマス・ロバート・マルサス、ロバート・トールレンズ大佐及びデーヴィッド・リカード等によつて表明せらるゝことになつたのである。就中、リカード等は、地代の本質と其の騰落が規制せらるゝ法則とを研究し、而して、地代が土地の使用に對して支拂はれるのは、偏へに土地が其の生産力に關して同じからざる品質のものであり、又、人口の發達と共に劣等なる品質若しくは比較的有利ならざる地位の土地が耕作せらるゝに至るが爲めであると觀た。即ち、彼れに従へば、地代は土地其の者に對して支拂はれるものではない。耕作の限界に於ける土地は何等の地代をも生ずることなく、唯り優等なる土壤若しくは地位の土地が其の所有者に地代を齎すに過ぎない。(cf. On the Principles of Political Economy, and Taxation, 1817, pp. 53-55.)

而して、彼れは曩きに引用せる「農業に於いては又、自然が人間と共に労働する」と做すスミスの意見を排して、

ブカナン (David Buchanan) の所言を其の『國富論』の評註から引用する。「自然が耕作の過程に於いて人間の勤勉と結合するが故に、農業は産物を生じ、従つて又、地代を生ずると做すの見解は單なる空想である」と云ふもの即ち是れである。(Wealth of Nations, ed. D. Buchanan, 1814, vol. II, p. 55; Ricardo, Principles, op. cit., pp. 64-66. 前掲拙著三六三頁参照)。

夙に、ジョン・ロックは、あらゆる物の上に價値の相違を置くは労働であると做し、同一地味の土地が耕作地たるに共有地たるに由つて生ずる相違を見る者は又、労働の投入が價値の最大部分を構成するの事實を發見するであらうと論じ、(Two Treatises of Government, 1690, pp. 258-259.)、又、最初に労働が自然の共有物に所有の權原を創始し得たる所以を認むることは極めて容易なる可しと説き、(Ibid., p. 269.)、文化の進歩に連れ、單なる素材は愈々益々人間の労働が之れよりして構成せる物の後に退くこととなるを示唆し、茲に近代人の技術及び工業に向ふ傾向の哲學的基礎を與へたのである。(cf. Rudolf Eucken, Die Lebensanschauungen der Grossen Denker, 9. Aufl., 1911, S. 362.)。アダム・スミスは斯くの如き主張から離れた。スミスは先づ一般經濟生活の複雑なる事情から抽象して、單純、原始、自然の状態を想定し、斯くの如き状態に在つては、價値を發生せしむるものが労働であることを看出した。然しながら、彼れは、彼れが抽象的に價値の唯一原因として承認した労働が、實際的にも亦、其の唯一原因に非ざることを明確に認めたのである。原則として三個の要素が相合して生産物の交換價値を構成する。生産の労働の外に、所要の資本に對する利子及び所要の土地に對する地代も亦存する。地主と産業的及び商業的資本家とは、彼れの生存せる社會に於いて支配的地位に立つて居つた。而して、彼れは在るが儘の状態を承認する其の冷靜なる蘇蘭人的態度を以つて、彼れ等地主及び資本家を自然的秩序の一部として承認したのである。(前掲

拙著第一章第八十一節参照)。リカードは前述せるスミスの抽象的理論と經驗的理論とが相互に矛盾するものに非ざること示さんとした。リカードは、スミスが、土地の領有及び資本の集積に先き立てる初期の社會に於いては、労働によつて取得せられ、欲求に従つて何等の制限なく増加せられ得可き貨物の相對的價值は之れを取得するが爲めに費さるゝ労働の定量に依存することを明かにせる點に於いて、之れに同意した。然しながら、彼れは、土地が領有せられ、資本が産業に適用せられた後に於いてすら、相對的價值が所要の労働量に依存することは其の以前と同様なることを主張するに於いて、彼れと相違するものである。又、リカードの地代學說に據れば、土地に對する最劣悪なる投資は、唯り賃銀及び利潤を支拂ふに足るものである。即ち、耕作の限界に於いては土地は地代を生ずることがない。茲には、生産物は全然資本及び労働によつて説明せられる。然しながら、資本は過去に於いて道具其他に投入せられたる労働に過ぎざるものである。斯くて、それは一般に労働に同化せられ得るものである。地代は、労働の附加的定量的使用によつて比例的に少なる収益を得ることから常に生ずるものである。(Ricardo, op. cit., p. 58)。彼れに従へば、生産せられた貨物の交換價值は、唯り之れが直接生産のみならず、特殊の労働を遂行するが爲めに要する用具、機械、原料、輸送等に投入せられた諸種の労働の總計に準ず可きものである。(Ibid., pp. 18-21)。彼れを以つて觀れば、地代は斷じて新たなる収入の創造ではなくして、常に既に創造せられた収入の部分である。(Ricardo, An Essay on the Influence of a Low Price of Corn on the Profits of Stock, 1815, 2nd ed., p. 15)。斯くて、地主の利益は常に其の社會に於けるあらゆる他の階級の利益と對立することとなる。地主は食料が稀少且つ高價なる際の如くに繁榮なることは決してないのであるが、總べての他の人々は低廉に食料を取得するに由つて利せらるゝ所が大である。(Ibid., p. 20)。

斯くて、リカードは、アダム・スミスを超えてロックの觀念に歸り、トマス・ロバート・マルサスが支持せんとするに最も切であつたスミスと重農學派との連結線を切斷し去つたのである。斯くの如き理論は又、社會主義者及び反資本主義的經濟論者の主張に對して、其の理論的基礎を與へなければ已まなかつた。然しながら、リカード其人と雖も、貨物の生産に投入せらるゝ労働量が其の相對的價值を支配すると做すの原理が、機械及び其他の固定的持續的資本の使用によつて著しく變更せしめられるものと觀て居た。(Principles, op. cit., pp. 22-23)。而して、一千八百二十一年に公にせられた其の『原理』第三版に於いては、相異なる資本の高が長短相同じからざる期間使用せらるゝに基ける相對的價值決定原理の變更が一層強調せられた。而して、其の生産に同一量の労働が投せられてゐる諸貨物が、同一時間内に市場に齎さるゝことを得ないならば、是れ等のものが交換價值に於いて相違す可きことは殆んど言を俟たざる所であると説き、(Principles, 3rd ed., 1821, p. 34)。而して、一見相異なるの觀ある二箇の假定的場合に就き、是れ等兩者の場合に於いて、一貨物の優越せる價格は、それが市場に齎される以前に經過しなければならぬ時間のより大なる長さに由るものと觀、而して、價值に於ける相違は、兩者の場合に於いて、資本として蓄積せらるゝ利潤より生じ、而して、利潤が保留せられた時間に對する正しき賠償に過ぎざるものと論じたる點に於いて、(Ibid., p. 35)、彼れは、一定の態様に於いて、單なる待時が生産的なることを暗示せるものである。而して、何が故に、所要の餘分時間が斯くの如く賠償せらる可きものであるかの問題に答へて、之れを制欲なる犠牲に求めんとするの理論は、サミュエル・リード及びデュー・ポレット・スクロップを経て、ナッソ・ウィリアム・シイニョアによつて展開せられる。(前掲拙著五二〇頁以下並びに『三田學會雜誌』第三十六卷第十一號所載拙稿『古版經濟書解題』——一千八百三十三年版デュー・ポレット・スクロップ著經濟學の諸原理』六八

一六九頁参照)。

## 六

然るに、ジェームズ・ミル及びジョン・ラムジイ・マカラックの如きリカードの直接後繼者等は、價值を以つて全然労働量によつて定まるものと做し、而して資本其の者も亦、労働を通じて存在するに至れるものであつて、一切の生産費は唯り労働にのみ廻り得るものと觀た。之れに反し、國民主義的經濟學者ローグデル卿は、夙に、土地、労働及び資本が、相異なる發達の段階に於いて、甚しく相異なる割合に於いて富の生産に貢献するも、而も、是れ等の三者が總べて富の本原的源泉であることを主張した。彼れを以つて觀れば、スミスは、資本の利潤を以つて労働者によつて原料に附加せらるゝ價值から支拂はれ、斯くて又、之れより引き出さるゝものと思料せるの觀がある。ロックも亦、略々同様の意見を述べてゐる。若し斯くの如きものが資本利潤の正確なる觀念であるならば、資本利潤は收入の派生的源泉であつて、本原的のものたることを得ざる可く、斯くて又、資本は、其の利潤が單に労働者の懐から資本所有者の懐への移轉に過ぎざるが故に、富の源泉と考へられ得ざることとなる可きであらう。チユルゴオは、資本の所有者を以つて、彼れが其の資本を土地の取得に使用したならば、其の資本が彼れに對して産出す可きものに對して賠償を受くるの權利あるものと思惟せるが如くである。(Reflexions, op. cit., § 60.) 然しなから、ローグデルに據れば、斯くの如きものは、正さに、それが如何にして、又何處より發したるかに關して何等の觀念をも興ふることなきものである。(An Inquiry into the Nature and Origin of Public Wealth, 1804, pp. 155-158.) 斯くて、彼れは資本の收受する利潤を以つて、上述の如き性質を有する單なる移轉に非ずして、自己の獨立せる勤務より生ずるものと主張し、爰に一種の間接生産力説を唱道した。彼れは資本が充當せらるゝ種々な

る用途を列擧するを以つて必要と觀た。(一)そは製造業者によつて機械を造り又取得するに使用せらるゝを得る。(二)そは原料を獲得し而して賃銀を前拂ひして之れを製造に致し、又は製造せられた貨物を市場に運び又之れを消費者に供給するが爲めに、即ち、國內交易に、使用せらるゝを得る。(三)そは他國の諸貨物の輸入若しくは自國製品の輸出の何れかに、即ち、外國交易に使用せらるゝを得る。(四)そは農業に使用せらるゝを得る。(五)單なる流通の目的を以つて使用せらるゝあらゆる國の資本の一部が存する。其の大小の比率は其の社會のあらゆる成員の取引を處置するに必要である。(Ibid., pp. 159-160.) 是れ等總べての場合に於いて、資本が使用せらるゝに非ざれば、人間の手によつて遂行せらる可き労働の一部を、それが取つて代るか、若しくは、人間自らの努力を以つてしては仕遂げることの出来ない労働の一部分を、それが遂行するかの孰れかによつて、利潤は一樣に發生する。(Ibid., p. 161.) 如何にして斯くの如く使用せられた資本の利潤が労働に取つて代ることから發生するかを會得し得るが爲めには、吾人は須らく、かの人間の最初の使用に於ける、即ち土地の耕作に於ける、機械に投入せられた資本の結果を考察す可きである。彼れが一箇の鋤の獲得に資本の一部を投下した瞬間、一箇の人は、明かに一日の間に、其の鋤を以つて、五十人が其の爪を使用して行ふことの出來たと同じだけの土地を、播種せらるゝが爲めに準備することを得なければならぬ。斯くて、此の部分の資本は四十九人の労働の必要を排除する。(Ibid., pp. 162-163.) 而して、斯くの如きローグデルの意見がマルサスによつて繼承せられたことは、吾人が前掲『經濟學史』上巻中に述べたるが如くである。(同書五〇七—五〇八頁参照)。而して、労働價值學説の拋棄、效用價值理論の發達と共に、之れに附隨せる系論として資本の生産力説が徐々に其の展開を見つゝあつたことも亦、吾人が他の機會に於いて考察せるが如くである。(『三田學會雜誌』第三十三卷第三號所載拙稿『第十九世紀前半英國社會主義學説の對抗理論と

して發達を見たる限界學說の先蹤(參照)。

## 七

重農學派から出發しながらも、價値を以つて全然人間の欲望に發するものと觀たるコンディヤックは、自然の資源を欲望の満足に適合せしむる總べての行爲、即ち農業、工業及び商業は孰れも效用を生ずるの力あるものであつて、生産的であると做し、農業を其の重農主義的優越の地位から黜け、而して工業及び商業を不生産的と做す同學派の主要理論に反對した。(『三田學會雜誌』第三十三卷第十一號所載拙稿『古版經濟書解題——一千七百七十六年版エチエンヌ・ボンノー・ジュ・コンディヤック著相互的關係に於いて考察せられたる商業と政治(參照)。其の經濟學は最も廣い意味に於いての勤勞 (industrie) の禮讚であつたサン・シモンは、彼れの所謂勞作者の階級中に、筋肉勞働者の外に、農業者、工匠、製造業者、學者、技術家、銀行家、商人、運輸業者等をも包含せしめて居つた。(Le Parti national.—Le Politique (Oeuvres de Saint-Simon et d'Enfantin, 1865-75, iii, p. 202-204.)。)

然るに、シャル・フリーレのフアンステールに於いては、各種の工業的勤勞、各種の工場及び機械生産は絶對必要の限度に縮小せられて、其の住民は殆んど全く其の園圃の注意のみに従事するものである。(『三田學會雜誌』第三十二卷第八號所載拙稿『古版經濟書解題——一千八百〇八年版シャル・フリーレ著四運動の理論其の他』參照)。而して、商業を以つて「寄生的産業」と觀るの意見も亦、彼れによつて採用せられた。(Fourier, Theory of Social Organization, with an Introduction by Albert Brisbane, 1876, pp. 94-110.)。洵に、彼れの學流は、特に、商業及び大多數の人的勤勞の不生産性を痛烈に非議するものであつた。(cf. Victor Considerant, Destinées sociales, exposition élémentaire complète de la théorie sociale, nouv. édit., Libr. Phalanst., 1851, I, p. 44.)。而も、彼れ

及び其の學派に屬する社會主義者等の這般の見解は、其の弊害の批判に據るものであつて、其の本質的不生産性の論證に基礎を有するものではなかつた。

是れに反し、吾人は物質を創造し若しくは滅却すること能はざるものであつて、單に物質中に、若しくは物質より離れて、效用を發達せしむるを得るに過ぎざるが故に、吾人は生産的勤勞なる名辭を物質的産物と等しく非物質的産物の創造に適用するに對して何等の科學的なる反對論も存することなきを論證せるの名譽は、ジャン・バチスト・セイに歸せらるべきものである。彼れは、明かに、人間の勤勞によつて生産せらるる價値の總べてが、其の創造の後、言はゞ、物質と合體せられて長短一定の期間保存せらるるを得る種類のもののみではなくして、高く評價せられ高價且つ永續的なる産物に代へて購入せらるるが故に實在性を有せざるを得ないが而も其れ自體何等の永續性をも有することなくして其の生産の瞬間に滅却する或るものゝ存することを認めた。(Say, Traité de économie politique, 6 ed., 1841, p. 122.)。醫師、官吏、辯護士、若しくは判事の勤勞は、彼れ等の勤勞なくんば、如何なる社會も存在し得ざるほど肝要なる性質を有する諸欲望を満足する。然るに、彼れ等の勤勞の收果は眞實ではないか。是れ等のものは、之れと交換に、スマイスが富たることを承認する他の物質的産物を取付し而して此の種の交換の反復によつて非物質的産物の生産者は資産を取得する迄に眞實である。而して、セイは、富が價値に比例するものであつて、之れを構成する價値の總額が大なれば大であり、價値が小なれば小であると觀たのである。(Ibid., p. 55.)。斯くの如きセイの所論は英國經濟學者に對して影響を與ふる所があつた。マルサスは、リカードと等しく、價値を以つて本質的に富と相違するものと認めながらも、生産的勤勞の問題が富の定義と緊密に關聯しつゝあることを認め、(Principles of Political Economy considered with a view to their practical application, 1820, p. 29;

Ibid., 2nd ed., p. 34.) 而して、吾人にして若し富を有形的にして物質的なる物件に限定することがないならば、吾人は總べての勞働を以つて其の程度に於いては相違するも、悉く生産的であると稱するを得可きであると做してゐる。(Ibid., 1st ed., p. 38. 此の箇所は再版に於いては削除せられてゐる。) 次いで、マカラックは其の同儕ジェームズ・ミルと異なり、製造人の勞働は賣り得可き貨物に體現せらるゝが故に生産的であると反し、奴婢の勞働は爾く體現せられざるが故に不生産的であると做す前掲スミスの所論を反駁した。曰く、「而も、製造人の勞働は眞に如何なるものを生産するか。それは専ら社會の便利及び便益の爲めに要求せらるゝ快樂品及び便宜品より成るのではあるまいか。製造人は物質の生産者ではなくして、單に效用の其れである。而して奴婢の勞働も亦、效用を生産することが明かではあるまいか。穀物、牛肉、及び其の他の食料品を産出する農夫の勞働が生産的であることは過く承認せらるゝ所である。然しながら、果して然らば、是れ等の物品を調理し、煮焼し、而して是れ等のものをして使用せらるゝに適せしむる必要且つ缺く可らざる任務を遂行する奴婢の勞働は何故に不生産的と看做さる可きであるか」(M. Culloch, The Principles of Political Economy, 1825, p. 406.)

シイニイオアも亦、生産的及び不生産的勞働者の間に、又物質的及び非物質的産物の生産者の間に、若しくは又貨物と勤務との間に劃せられんことを企圖せられた區別は考察せらるゝ對象たる諸物其の者に存するに非ずして、是れ等のものが吾人の注意を惹く様式に存する差違に基くの觀あるものであると做した。吾人の注意が主として變更を惹起する行爲に對するに非ずして、這般の行爲の結果に對し、變更せらるゝ物に對して喚起せらるゝ場合には、經濟學者は、這般の變更を惹起せる人を、生産的勞働者、若しくは貨物又は物質的産物の生産者と名附けた。他方に於いて、吾人の注意が主として變更せらるゝ物に對するに非ずして、這般の變更を惹起する行爲に對して喚起せ

らるゝ場合には、經濟學者は這般の變更を惹起する人を、不生産的勞働者、彼れの努力を勤務、又は非物質的産物と名附けたのである。靴工は革及び絲並びに蠟を一足の靴に變ずる。靴擦きは穢れた一足の靴を清潔なる一足に變ずる。最初の場合には、吾人の注意は主として變ぜらるゝ底の物件に對して喚起せられる。斯くて、靴工は靴を造り若しくは生産すると稱せられる。靴擦きの場合には、吾人の注意は主として遂行せらるゝ底の行爲に對して喚起せられる。彼れは清潔なる靴と云ふ貨物を造り若しくは生産するとは云はれないで、是れ等のものを清潔にする勤務を遂行すると稱せられる。孰れの場合にも、固より、行爲と結果とが存するが、而も、一方の場合には吾人の注意は主として行爲に對して喚起せられ、他の場合には結果に對して喚起せられる。(Political Economy, 3rd ed., 1854, pp. 51-52.) 而して、シイニイオアは、吾人の注意を主として行爲に向け、若しくは主として結果に向ける諸原因の中に、第一には、生産せらるゝ變化の程度、而して第二には、其の變化によつて利益する人が概して這般の利益を購入する様式が存してゐるやうであると見てゐる。仕立屋は反物を上衣に造ると云はれるが、紺屋は染められてない反物を染められた反物に造るとは云はれない。名稱の變化は頗る重要である。紺屋によつて生ぜしめられる變化は仕立屋によつて生ぜしめられるものよりも恐らく大であらうが、其の反物は仕立屋の手を通れば名稱が變るが、而も、紺屋の手を経て、それは變化することがない。紺屋は新しい名稱を生ぜしむることなく、従つて、吾人の心中に新しい物を生ぜしむることがなかつた。然しながら、シイニイオアに従へば、主たる事情は支拂がなされる様式である。彼れ等の努力が賣却せらるゝ様式は奴婢と其の他の勞働階級との間の唯一の相違を構成する。穴藏から密間へ石炭を搬ぶ下僕は、是れ等のものを炭坑の底から坑口へ引き上げる坑夫と恰も同一の作業を遂行する。然しながら、消費者は引き上げられ而して穴藏に收められる際には石炭其の者に對して支拂ひ、又、下僕には是れ等のものを持

ち上げる行爲に對して支拂ふ。斯くて、坑夫は石炭なる物質的貨物を生産し、下僕是非物質的生産物即ち勤務を生産すると稱せられる。兩者は、事實、物質の現存微粒子の状態に於ける變化と云ふ同一物を生産するのであるが、而も、吾人の注意は一方の場合には行爲の上に、他の場合には其の行爲の結果の上に注がれる。(Ibid., pp. 52-53)。一層未開なる社會状態に於いては、殆んど總べての製造業は家内ののである。吾人が是れ迄言及しつゝあつた語法が正しいとしたならば、分勞は紡ぎ手と織り手とを不生産的労働者から生産的労働者に、非物質的勤務の生産者から物質的貨物の生産者に變成したと稱せられなければならぬ。(Ibid., p. 53)。

生産に關して斯くの如く説けるシイニョアは、消費に關して生産的消費と不生産的消費とを分つた。生産的消費は、將來の産物を生ぜしむる底の一貨物の使用である。不生産的消費は、勿論、何等將來の産物を生ぜしむることなき底の使用である。不生産的消費の特性は、それが消費者自身以外如何なる人の享樂をも増加することなきに存する。社會の自餘の者に對する其の唯一の影響は、彼れ等の使用に適用せられ得可き貨物の嵩が其れだけ減少するに在る。(Ibid., p. 54)。而して、彼れは、最豊饒なる地域に居住しつゝある最も勤勉なる人口も、彼れ等にして其の勞働の總べてを即時的結果の生産に捧げ、而して其の産物を其の生ずるに従つて消費したならば、忽ちにして彼れ等の極度の努力も單なる生存の必需品をすら生産するに不充分なるを看出す可きであらうと説く。彼れは、之れなくんば、勞働及び自然的要素も無効なる可き生産の第三要因若しくは用具に「制欲」(Abstinence)なる名稱を與へる。彼れは此の名辭によつて、或る人が其の支配し得る所のもの、不生産的使用を制止し、若しくは即時の結果を得可き生産に對して、結果を見ることの遠い生産を有意的に選ぶの行爲を表明する。經濟學の根本命題として彼れが「勞働及び富を生産する其の他の用具の力は、是れ等のもの、産物を、更らに其れ以上の生産の手段として使用するに

由つて、無限に増加せしめられ得可き」ことを確説せるの時、彼れは實に這箇第三生産用具の結果に關説せるものであつた。(Ibid., p. 58)。

斯くの如き第三命題に對するものは、「農業上の技術が依然として變化なき間は、一定地域内の土地に使用せらるる附加的勞働は概して比較的小なる割合の収益を生ずること、換言すれば、充當せらるる勞働の増加する毎に總収益は増加するとしても、其の収益の増加は勞働の増加に比例することがない」と做す第四命題である。(Ibid., p. 26)。アダム・スミスが、農業の進歩遅々たる所以を以つて、分勞が農業よりも工業に對して其の適用大なるに在りと觀たことは既述の如くである。次いで、前記一千八百四十四—五年の穀法論争に際し、ウェストは其の著「土地に對する資本の適用」に於いて、分勞及び機械の適用が、諸製造業に在つて、勞働をして絶えず生産的ならしめることを述べ、而して、同一の諸原因は農業に於いても作用するの傾向を有しつゝあるに拘らず、他の原因、即ち既に耕作せられつゝあるものよりも更に劣悪なる土地に依頼し、又は更らに豊沃なる部分に對して更らに集約的にして費用大なる耕作を施す必要は、是れ等の影響を相殺して猶ほ餘りあるものであることを論じた。(Essay on the Application of Capital to Land, 1815, p. 25)。アルサスも亦、其の「地代の本質並びに増進の研究」中に於いて、製造品の眞の價格、即ち其の一定量を生産するに必要な勞働及び資本の分量は殆んど常に減少しつゝあるに反し、富裕にして進歩しつゝある國家の原産物に對して附加せられた最後のものを得るに必要な勞働及び資本の分量は殆んど常に増加しつゝあることを認めた。(An Inquiry into the Nature and Progress of Rent, 1815, p. 45)。リカードも亦、多く之れと異なることのない意見を有して居つた。シイニョアは是れ等先輩の意見を傳承して、彼れの第四命題を展開せしめ、「附加的勞働は、製造業に使用せらるる際には、割合に能率大であり、農業に使用せらるる際には

は小である」と論結した。(Senior, Political Economy, op. cit., p. 81.)。這箇農的産業と製造的産業との間の相違は、農業が享有し、製造的産業が享有することのない同一原料から附加的産物を取獲するの力より成る。(Ibid., p. 82.)。如何なる附加的労働若しくは機械も原綿の一封度を製綿の一封度以上に作り上げることが得ない。然るに、同一ブッシェルの種穀及び同一地積の土地は、其の取り扱はるゝ労働と熟練とに従つて、四ブッシェル或ひは八ブッシェル若しくは十六ブッシェルを生産することを得可きである。同一原料の上で使用せられても、増加した労働を絶えず増加しつゝある産物を以つて拂ひ戻す土地の享有する利益は、其の産物の増加が概して労働の増加に對して有する遞減的割合によつて打ち勝たれる。而して、産物のあらゆる増加に對して原料の等しき増加を要する製造業の不利は、原料の増加せる數量が仕上げられる便利が絶えず増加することによつて償はれて尙ほ餘りがある。(Ibid., p. 83.)。

既に、ロバート・トレンズ大佐は、少くも其の一千八百十五年の『對外穀物交易論』に於いては、收益遞減を以つて一般準則と做すの理論に對して言質を與ふることなく、却つて收益の遞増が分勞の擴張より生じ得可き可能性を看逃すことがなかつたのであるが、『三田學會雜誌』第三十七卷第一號所載拙稿『古版經濟書解題——一千八百十五年版ロバート・トレンズ大佐著『對外穀物交易論』五九一六〇頁参照)、ジエームズ・ミルは其の一千八百二十二年の著Elements of Political Economy, 中に於いて、地代を論ずるに當り、收益の實際的減少を主張し、毫も生産上に於ける改良の結果に注意を拂ふことなく。(cf. Ibid., pp. 1323.)。又、マカラックは其の一千八百二十五年の著The Principles of Political Economy, に於いて、何等遲疑する所なく同様の信念を表明し、單に收益の遞減が發明及び改良によつて僅かに一時中斷せらるゝことあるを認めたに過ぎなかつた。(cf. Ibid., pp. 205, 277-278, 383.)。

然るに、シニイオアは、這般の命題が、一般的ではあるが、普遍的ではなく、重大なる例外の存することを免れざるものと做した。斯くの如き一般準則に對する最も重要な例外は、労働の増加が熟練の増加によつて伴はるゝ際に生ずる。より有效なる道具、より良好なる輪作、より大なる分勞、略言すれば、農業技術の改良は、概して農業労働の増加を伴ふ。是れ等のものは、常に増加が一國の人口並びに資本の増加によつて伴はるゝ際に、斯くの如き増加を伴ふ。而して、是れ等のものは、常に、其の施さるゝ土壤の劣等又は其の減少せる比例的力を相殺し、又屢々之れに打ち勝つ。然しながら、一定地域の土壤の産物が、其の上に使用せらるゝ労働の高如何に拘らず、永久に幾何學的に増加することを得るは明かに不可能である。他方に於いて、製造労働者數に於けるあらゆる増加は、單に之れに對應する生産力によつて伴はるゝばかりでなく、増加せる生産力によつて隨伴せられる。シニイオアは、由つて以つて英國製造業の進歩が懸がて阻止せらる可きことを豫示することの出来る唯一の障礙は、原料及び食料輸入の困難増加であると觀てゐる。原産物の輸入が之れに加工するの力と歩調を共にすることが出来たならば、富及び人口の増加に對して何等の限界も存せざる可きである。(Senior, Political Economy, op. cit., pp. 85-86.)。斯くの如きは正さに英國の工業が飛躍的發展を遂げ、一年と益々其の生産高を増加し、其の生産費を低減し、而して、新興諸國から有利に食料及び原料を取獲することの出来る社會状態を反映するものであつた。

英國に於いては、大體に於いて、人口の行進が改良の其れよりも一層確實且つ不斷であつて、終には之れを追ひ越さなければならぬ、斯くて又、農業労働の生産力に於いて不斷の減退的傾向が存しなければならぬと一般に想像せられて居つた時。(Mounifort Longfield, Lectures on Political Economy, delivered in Trinity and Michaelmas



Terms, 1833, 1834, p. 181.)、米國及び佛國に於いては、全然之れと相違せる思想傾向を生ずるに至つた。

北米合衆國は第十八世紀末に於いては確然たる農業國であつて、殆んど何等の製造業をも有することがなかつた。斯くの如き國情は獨立と安固との爲めに均衡宜しきを得たる國民經濟と産業の多種不同とを主張するの論を産まなければ已まなかつた。農業國は、自國の農産物と交換するを要する工業國の政策の爲めに不利益を蒙らなければならぬ。一千七百九十一年十二月五日、米國下院に致した Report on Manufactures に於いて、アダム・スミスに背馳して保護關稅による製造業の組織的養成と必要なる場合には農業に對する獎勵金とを提唱せるアレグザンダー・ハミルトンは、製造業に費さるゝ労働は農業に使用せらるゝ其れと比較せらるゝ時は不生産的であると做すの主張を考察しなければならなかつた。彼れは、農業が、眞に、あらゆる他種の産業の上に強く卓越を主張するの權利を有することを認めるものではあるが、而も、そはあらゆる他の産業部門に比するも猶ほ生産的であると云ふことは是れ迄に其の主張を支持するが爲めに與へられたよりも更らに以上の論證を要するものと觀た。(Papers on Public Credit, Commerce and Finance by Alexander Hamilton, ed. Samuel McKee, 1934, p. 180.)。彼れは『國富論』の著者が、農業の生産性の卓越を認むるが爲めに主張する論據の一たる、土壤の諸生産に在つては自然は人間と共働するものであり、是れ等兩者の結合労働の結果は人間のみの労働の其れよりも大でなければならぬと做すの意見を以つて、奇怪且つ淺薄なるものと觀る。彼れを以つて觀れば、人間のみの労働が人間と自然の結合せる労働よりも更らに生産的なることある可きである。彼れは又、農業に使用せられた労働が著しく週期的であるに反し、多數の製造業に従事する労働は不斷且つ正規的であり、又、土地の耕作者の間には工匠の間に於けるよりも懈怠の例多く、且つ製造業は農業よりも工夫の才の働きに對して廣き界域を開くことなど、製造労働が農耕労働以上に有する利益

を擧示する。(Ibid., pp. 183-184.)。他の論據たる、製造労働は何等地代に相當するものを生ずることがないと云ふ主張を以つて、彼れは、形式上若しくは言語上の區別に基礎を有するものと觀る。土地は、其れ自體、其の所有者によつて占有者若しくは借地人に立て替へられ若しくは貸與せられた資本であり、彼れが收受する地代は、所有者自身によつて使用せられないで、彼れより之れを借り受け、其の土地に投資し、之れを改良するが爲めに自ら第二の資本を前拂ひし、之れに對して又通常の利潤を收受する他の者によつて管理せられる土地に於ける或る一定資本の普通利潤に過ぎないことが看過せられた觀がある。斯くて、地主の地代及び借地農の利潤は、二箇の相異なる人々に屬し而して農地の耕作に於いて結合せられた二資本の普通利潤以上の何者でもない。(Ibid., p. 184.)。是に於いて乎、地代は唯一の生産性若しくは優越せる生産性の準度たるものではない。問題は、依然、一幅の土地の購入及び改良に使用せらるゝ或る一定資本の費用を支拂へる後に於ける餘剰が、製造場の運営に使用せらるゝ同様の資本の其れよりも大であるか又は小であるか、若しくは一方に使用せらるゝ或る一定資本及び或る一定労働量から生ぜしめらるゝ全價値が他方に使用せらるる等しき資本及び等しき労働量から生産せらるゝ全價値よりも大であるか又は小であるか、若しくは寧ろ、恐らくは、農耕の事業若しくは製造の其れが、其の一方若しくは他方に使用せらるゝ資本の定量及び労働の定量の複比に従つて、より、大なる産物を生ずるであらうかでなければならぬ。(Ibid., p. 185.)。是れ等諸問題の孰れの解決も容易ではない。そは比較せらる可き諸客體の正確なる知識に依存しつゝある數多くして複雑なる細目を包含する。一定の報告は製造業の優越せる生産力を肯定する。農業の優越せる生産力は確證せらるゝことがない。政府の政策は須らく生産力以外の考察によつて決定せらる可きものである。(Ibid., pp. 185-187.)。而して、彼れは、吾人が他の機會に於いて述べたるが如く、工業的なる北部諸州と農業的なる南部

諸州の間には利害關係の衝突が存すると做す一般に行はれつゝある見解に對して、製造業の繁榮と農業の繁榮との間に存する密接なる關係は、經驗によつて確立せられ、又一般に承認せられたる準則であると説いて居つた。(Ibid., p. 230.) 『三田學會雜誌』第三十五卷第九號所載拙稿『經濟的自給主義思想史概観』(四一頁参照)。彼れによつて表明せられたる土地と資本の形態に外ならずと做すの觀念は、其の後、所謂米國學派の經濟思想史に見る可きものとなつた。

米國學派の始祖とも稱せらる可きヘンリー・チャールズ・ケーリーは、無限なる未開拓の富源と急速なる産業の發達とに鼓舞せられて、あらゆる耕作の段階に對して土地收益遞減の法則が普遍的眞理であることを拒否した。彼れは先づ一千八百三十七・四十年の著 *Principles of Political Economy* に於いて、農業に對する收益が斷じて遞減するが如きことなく、却つて實際には著増せるを示す可き諸事實を提示した。(Ibid., vol. I, 1837, p. 58; vol. III, 1840, pp. 69, 70.) 次いで、彼れは其の一千八百四十八年の *The Past, the Present, and the Future* 及び五十八・五十九年の *Principles of Social Science* に於いて、同じく、労働に對する收益が人口の増加に連れて減退する傾向の存せざるのみならず、事實は却つて其の反對なることを主張した。ケーリーは、吾人の産業生活に交渉の有る土地は實に人間によつて爾く形成せられた生産の要具で、其の價值は、過去に於いて之れに投入せられた労働に基くものであると觀てゐる。(それは過去の労働の高に依らずして、現在の状態の下に於いて新なる土地を之れに等しき生産力を有せしむるに必要な労働に依つて量定せらるゝものではあるが) 彼れは、經驗に徴して、瘠地が輕鬆にして乾燥せる高地であつて、之れを耕作すること容易なるが爲めに、人は先づ斯くの如き土地を占領するの事實を立證し、而して、丘陵を耕耘し始めた人々が、最瘠地の枯渴、人口及び人知の増加、資本の集積と共に、

河畔に向つて耕作を進め、豊汽なるも、而も沼澤、浸水、及び沼癘多き谿谷を使用するに至ると説く。労働は絶えず生産性を増加し、富は増大し、人は進歩する。食料、光線、空氣、衣料及び燃料に對しては、唯だ一の法則のみが存する。人間は、總べての、又あらゆる場合に於いて、最悪の機械を以つて始め、而して最良のものに向つて進む。斯くて、富、人口及び結合の習慣の發達と共に、絶えず減少しつゝある労働を以つて、生活の總べての必需品、便宜品、娛樂品及び奢侈品の増加せる供給を取得することを得せしめられる。(The Past, the Present and the Future, p. 50.)

斯くて、ケーリーに取つては、リカードの地代説は、一切の經驗に恃れる思辨的空想である。收益の割合と看做された地代は、資本に對する一切の利子と等しく、時の經過に連れて減少するが、而も絶對の高としては増加する。労働者の配分は、相對的にも、絶對的にも等しく増加する。斯くて又、是れ等相異なる社會階級の利益は調和を保つ。斯くして、彼れは個人主義的經濟學に依據すると共に、之れを更らに高く、更らに鞏固なる基礎の上に置き、社會主義的攻撃に對して之れを擁護せんことを企圖したのである。

## 九

略々同様の思想的傾向は佛蘭西に於いても亦、之れを認めることが出来る。第十九世紀に於ける最大なる經濟學者の一人と言はれてゐるシャルル・ド・ペリエ (Barthélemy Charles Pierre Joseph Dunoyer) は王政復古政府の貴族政治的權威主義に對して抗戦し、生産的階級に對して最大限の機會を與ふるの社會的必要に基礎を置ける學說を唱道して居つたのであるが、七月革命の後、ルイ・フィリップのブルジョア政治が成立するや、熱心に之れを歡迎し、而して、新政府が漸次勢力を得つゝある社會主義派並びに革命派に對して産業を防禦す可き堡壘を築かんこ

とを提言せるが爲めに彼の満足は一層大となつた。聽がて、先づアルエー縣の知事として任官し、一千八百三十二年、ソム縣に轉じ、三十八年、參事院 (conseil d'Etat) に入つた彼は、一千八百四十五年、De la Liberté du travail ou simple exposé des conditions dans lesquelles les forces humaines s'exercent avec le plus de puissance. の題下に其の舊著を新刻した。(彼れが巴里の Athenaeum Institution に於いて、理濟學及び倫理科學に關して行つた連續講演を L'industrie et la morale considérées dans leurs rapports avec la liberté. の題目を附して出版したのは、一千八百二十五年のことであつた。彼れは同三十年之れに多數の附加を行ひ、Nouveau traité d'économie sociale. の題下に二卷として再刻したのであるが、同三十五年、恰も第二卷が發賣せらるゝ直前、火災の爲めに殆んど其の全部を焼失せしめた。其の後、其の範圍を擴張し、三卷として發兌したものが即ち此の大著である。彼れに取つては、「勞働は生産力の唯一の根元である。資本は人間の創造物であり、土地は單に資本の一形態に過ぎない」。諸物は其の中に蓄藏せられた勤務の高に從つて交換せらるゝが故に、價值は勤務を量定する。彼れはマルサスの人口理論を熱心に支持するものではあるが、而も、地代説に信に置くものではなかつた。自然の勤務は無償であつて、費用として認めらる可きものではない。土地に對する支拂は資本に對する利子に過ぎざるものである。彼れは、官吏、並びに高等職業に従事する階級から引き寄せられたブルジョワ王政支持者等の業務を是認するが爲めに、産物に關する古典經濟學派の概念を擴張して、「非物質的富」の理論を力強く主張した。彼れは、經濟的見地から觀れば、總べての富は、即ち、「非物質的」のものに外ならないとすら言つてゐる。彼れは一切の生産行爲を分つて、人間に對して作用するものと財産に對して作用するものとに分つ。醫師、藝術家、教師、及び僧侶は、夫々、人間の肉體、想像力、知性、及び行狀に影響を及ぼすものである。物質的生産は、(一)抽出(二)運輸(三)工(四)農の四つに分た

れる。單純なる交換は生産ではない。「勞働と交換とは、其の本質に於いて、絶対に相異なる事實の二項目に屬するものである。勞働は生産を意味する。商業及び交換は毫も此の種のものを含むものではない」と説いた。(ibid., vi, p. 599.)

デュヌワイエは、生産の直接目的が人間其の者に存すると、物件に存するとに依つて、勤務の生産 (production de services) と、富の生産 (production de richesses) とを分つて、非物質的富を高調したのであるが、彼れの後輩フレデリック・パスチアに至つては、更らに其の歩を進めて、市場に於いて交換せらるゝものは唯り勤務のみであると觀た。彼れは、特に生産を論じてゐない。彼れに取つては、經濟學の主題を形成するものは勤務の交換である。而して、彼れは、價值を以つて交換せらるゝ二箇の勤務の比率であると觀る。(Oeuvres complètes, par Pailletet, dixième ed., p. 145.) 斯くて、彼れは費用及び犠牲を強調するリカード學派の價值理論から離れる。彼れは又、收益遞減原理の實際的適用性を拒否する。經濟的便益は人口の増加から生ずる。收益の遞増的傾向は其の遞減的傾向に代るが故に、人口に對する抑制は不必要となる。彼れは又、地代を以つて、開拓、排水、構圍、施肥及び其の他永續的改良によつて天賦の土壤を耕圍に變ずる際に、地主若しくは其の先人の支拂へる苦痛及び費用に對して支拂はるゝ報酬に外ならざるものであると主張する。斯くて、彼れは、社會主義者によつて土地所有權制度を攻撃するの武器として使用せらるゝに至つたりカードの地代理論を脱却し得るものと思惟したのである。(ibid., p. 257.)

+

凡そ斯くの如き時期に於いて、經濟學を其の最高の完成状態に到達せしめたと禮讚せられたジョン・スチュアール・ミルの『經濟原理』は出版せられたのである。彼れは、此の著中に於いて、「不生産的勞働に就いて論じ、セイに

従つて、吾人が生産し、若しくは生産せんと願望する所のものは常に效用であると做し、労働は物件を創造するものではなくして、效用を創造するものであると觀た。(Principles of Political Economy, vol. I, 1848, p. 56.)。而して、彼等は労働によつて生産せらるゝ效用を三種に分つた。第一は、外界的物件中に固定せられ體現せらるゝ效用、第二は、人間中に固定せられ體現せらるゝ效用、而して、第三は、如何なる物件中にも固定せられ體現せらるゝことなくして、提供せらるゝ單なる勤務より成る效用である。(Ibid., pp. 57-58.)。是れ等三種の労働の中、孰れが生産的と思惟せらる可きであるか。效用の生産は、人類が生産的労働に就いて形成するの常であつた總念を満足することがない。彼等は生産的労働の目的は效用ではなくして、富であるかと考へる。而して、彼れに従へば、蓄積し得ることが富の觀念に取つて缺く可らざるものであつて、生産せられて後、使用せらるゝの前、暫くの間保存せらるゝことを得ない諸物は、斷じて富と看做さる可きものではない。蓋し、是れ等のものゝ如何に多くが生産せられ享有せられ得可しとしても、之れに依つて利せらるゝ人は毫も富裕の度を増すことなく、聊かたりと雖も境遇に於いて改善せらるゝことなきが故である。(Ibid., p. 59.)。通俗的觀念が、物質的對象中に固定せらるゝ效用の所有に富を限定するは、是れ等のものが物質的であるが故ではなくして、是れ等のものが蓄積を許すが爲めである。斯くて、ミルは、生産的労働なる文字によつて、單に物質的對象中に體現せらるゝ效用を生産する努力の種類のみを了解しようとした。然しながら、物質的産物の増加が其の究竟の歸結であるとしたならば、其の直接の結果として何等の物質的産物をも生ずることのない労働に對しても、彼等は生産的なる稱呼を拒否するものではない。(Ibid., p. 60.)。之れに反し、不生産的労働によつて、物質的富の創造に終結することのない労働、如何に廣く若しくは盛んに營まれても、社會及び一般世界をして物質的産物に於いてより、富裕ならしむることなく、却つて、斯く

使用せらるゝ間、労働者等によつて消費せらるゝ總べてのものによつて之れをより、貧窮ならしむる労働が了解せられる。經濟學の用語に於いては、何等享樂の永續的手段の蓄積せられたストックの増加なくして、直接の享樂に終る總べての労働は不生産的である。(Ibid., p. 61.)。

斯くて、佛國に於いては、パスチアを主將とせる一部の經濟學者等が、傳統的分類より結果しつゝある弊害に動かされて、富なる概念を彼れ等の學問の主題たらしめざること以外に何等の救濟策も存せざるものと觀たるに反し、ミルは甚しく狹隘なる富の概念を探り、明かに經濟的研究の妥當なる主題たるものゝ多くを除外し、而して労働を以つて生産的及び不生産的の二者に分つ舊套なる分類を復活し、運搬人及び商人を生産的労働者の部類に加へながら、奏樂家、俳優、公開演説家若しくは朗誦家及び見世物師と共に、陸海軍人、立法者、裁判官、司法官及び總べての他の官吏をも此の部類から排斥したのである。(cf. Ibid., p. 58.)。而も、彼れは前掲『經濟學未決定問題』に於いては、裁判官、立法者、警察官及び兵士の労働、並びに彼れ等の支持の爲めに支出せらるゝ經費の如きものを以つて、部分的に生産的であり、部分的に不生産的であつて、適當に確然孰れの部類にも排列せらるゝこと能はざるものと做して居つた。(Essays, op. cit., p. 85.)。彼れは這般の學說に於いて、實に驚異的退歩を行へるものと稱せられてゐる。而も、彼れは、固より、生産が人間存在の唯一目的と看做さるゝに非ざれば、不生産的たる語は何等侮辱的意味を有するものではないと思惟して居つたのである。

ミルは又、『原理』の初版に於いて、土地の所産は、他の事情にして等しければ、使用せらるゝ労働に於ける増加に對し遞減的比率に於いて増加すると云ふことが、農的産業に關する普遍的法則ではあるが、而も、這般の原理が拒否せられたることある旨を述べて居つたのであるが、(Ibid., p. 217.)。後版に於いては、特に「有名な米國經濟

學者エッチ・シー・ケリー氏に於いて、それはあらゆる反駁者に達着したることを特記した。(Principles, new impression, 1904, p. 111.)。而して、慥かに自己の設定せる法則を餘りに普遍的なる態様に於いて、宣明し、新たに定住せられた地方に於ける最初の耕作に就いては眞ならざるを注意することのなかつた経済學上の最高權威中の數者に對してケリー氏が正當なる抗論を提起せるを認めたとであるが、而も、彼は斯くの如きケリーの主張が彼れ自身の理論を覆すものでないことを主張した。(Ibid., p. 112.)。彼はケリーの如く極端に論ずるものではなく、又、農産物の生産費、従つて又價格が、人口の増加に連れて、常に又必然的に騰貴すると主張するものでもない。それは斯くの如き傾向を有するが、而も、其の傾向は、長き期間に亘つてすら、阻止せられ得るものであり、往々にして阻止せられる。其の結果は單一の原理に依存せずして、二箇の相對立する原理に依存する。常に土地よりの收益遞減法則に對立する他の作因が存する。それは實に文明の進歩以外の何者でもないのである。而して、彼は、農業の改良に二種ありと觀。一は、之れに等しき労働の増加なくして、土地をしてより大なる絶對的産額を生ずることを得せしむるものであり、他は産額を増加する力を有することはないが、其の取得せらるゝ労働及び費用を減少する力を有するものであると做し、順次是れ等の改良に就いて述べる。(Ibid., pp. 113-114.)。

則ち、ミルは、其の先輩等と等しく、土地の收益に關して、二箇の相對立する傾向の存在を承認するものではあつたが、而も、彼れと雖も、未だ、土地收益遞減法則が靜的法則であつて、進化的法則に非ざることを知覺することなく、リカードオ及びウェストと同様に、這般の傾向が將來に亘つて優勢を占む可きことを豫言したのである。而して、彼は、其の價值論に於いては、ホイットテーカーの述ぶるが如く、サミュエル・ベイリーの先蹤に従ひ、ウェストが、收益の遞減及び遞増を以つて生産の二状態であつて、如何なる貨物も是れ等の状態を通過することあ

る可きではあるが、而も、恐らくは、農産物は第一の状態に於いて存し、製造品は第二の其れに於いて存すると看做したるに反し、是れ等のものを二對の貨物に歸し、同一産物は一方の状態より他の状態に移るを得ざることを含意せしめたるの觀がなくはなかつたのである。(Edmund Whittaker, A History of Economic Ideas, 1940, p. 395.)。ベイリーは、價值の原因に就いて述ぶるに當り、亦換せられ得る物品を三種に分ち、第一を獨占せらるゝ貨物、第二を、其の生産に於いて一定の人々が社會の爾餘の者よりも大なる便利を有し、斯くて又、是れ等爾餘の者の競争がより大なる費用に於けるの外は、増加することを得ない貨物、第三を、其の生産に於いて競争が拘束なく作用する貨物と做した。(A Critical Dissertation on the Nature, Measures, and Causes of Value; chiefly in reference to the writings of Mr. Ricardo and his Followers, 1825, p. 185.)。而して、彼は第二種のものをも以つて、勤勞と競争とによつて増加せらるゝの餘地あるものではあるが、而も、唯りより大なる費用に依つてのみ然るものであると觀てゐる。(Ibid., p. 103.)。彼は、此の品目の下に、穀物、一般原産物、金屬、石炭及び其の他、種々なる重要物品を分類するを得可きものと思惟した。(Ibid., p. 194.)。而して、彼は、第三種の物品の交換せらるゝ數量を決定する主要なる事情が生産費であることは異論のない所ではあるが、而も、此の生産費なる名辭に附せらる可き意味に關しては最大なる英國經濟學者等の間に正確なる一致なきものと做してゐる。(Ibid., p. 200.)。ミルは價值の理論を述ぶるに當り、交換價值に取つて缺く可からざる條件を以つて、效用と獲得の困難であると欲し、而して、獲得の困難が常に同種のものに非ざることを説いた。之れには供給の絶對的制限に存する場合と、單に其の貨物を生産するに要する労働及び經費に存する場合とがある。一定の労働及び經費なくしては、それは取得せらるゝを得ない。然しながら、或る一定の人が甘んじて是れ等のものを負擔せんとしつゝあるならば、必然、其の産物の

増加に對しては何等の限界も存せざる可きである。前二者の中間に位し、寧ろ又より複雑なる場合が存する。勞働と投資とが收益遞減の下に適用せらるゝ場合が是れである。是れ等の部類に農産物並びに概して大地の粗生物は屬す。(Principles, op. cit., 1st ed., vol. I, pp. 524-526.)

## 十一

斯くの如き間に、獨逸に於いては、見地を分つて、生産的及び不生産的の問題を考察せんとするの舉が行はれた。ヘルマンは、生産者、消費者及び國民經濟全體の三見地から經濟的生產を論じた。生産者は、彼れが其の國の該職業に普通なる利潤率を以つて、彼れの資本の支出を回收する場合には、其の勞働を生産的と稱するの常である。消費者は、彼れが其の給付を利用することが出来、又相當なる價格を以つて之れを取得することの出来る總べての種類勞働に生産性を歸せしめる。最後に、全體としての國民經濟は市場に於いて賣り出さるゝ財貨の量を増加する總べての勞働を以つて生産的と看做すのである。彼れは又、技術の見地よりする生產を以つて經濟の見地よりする生產から區別せられなければならぬものと觀た。技術的生產性は、勞作者の心に浮ぶ技術的思想の實施に依存する。技術的には最も高く生産的なる勞働が經濟的損失を來すことが生じ得る。(Staatswirtschaftliche Untersuchungen, 1832, S. 24 ff.)

次いで、ロッシヤは、此の點に於いても亦、私經濟と世界經濟との間に重要な相違の存することを認めた。私經濟は、勞働の生産性を、其の産物の交換價值によつて測定し、世界經濟は之れを其の使用價值によつて測定する。這般の關係に於いては、國民經濟は兩者の中間の地位を占める。而も、嚴密に言へば、世界資産を増殖する底の勞働のみが生産的と稱せらる可きものである。(Die Grundlagen der Nationalökonomie, 1854, S. 100.) 而し

て、彼れは其の著の後版に於いて、一國民が愈々偉大であり、自由であり且つ教養あるものとなるに従ひ、益々、私經濟の生産性は又國民經濟の生産性となり、又、國民經濟の生産性は世界經濟の生産性となるの傾向あるものである旨を附言した。(a. a. O.; 21. Aufl., 1894, S. 128.)

茲にロッシヤは此の問題を倫理的に取り扱ひ、之れを其の最初より、高き形態に復歸せしめんとする意圖の一端を示したのであるが、而も、第十九世紀後期に於ける一般の傾向は、人間の欲望を満足する總べての行爲を以つて生産的と呼稱す可きものと做すに存したるの觀がある。經濟的相貌を有する總べての行爲の目的は欲望の満足である。ロッシヤは「直接たると間接たるとを問はず、總べて正しき(wahr)人間の欲望満足に有用であると認められたものを稱して財と云ふ」と説いた。(Ib., S. 2.) 然るに、一般經濟學者は「善なると不善なるとを問はず、既に欲望にして存する以上は不正不徳の欲望を満足せしめ得るものも亦、財でなければならぬ」と認めた。(Adolph Wagner, Grundlegung der politischen Ökonomie, I, 1892, S. 289.) ナボリの經濟學者アウグスチニス(Matteo de Augustinis)は、夙に、放火犯人が自己に取つて破壊の快樂を生ぜしめたが爲めに、彼れを以つて生産的と稱するの極端に走せたと言はれてゐる。(Institutioni di economia sociale, 1837.) 經濟財は又物質的及び非物質的の兩者を包含するものと認められた。經濟財を構成するものは、物質性ではなくして、交替的用途との關係に於ける稀少性である。而して、廣義に於ける生產は、唯り本原的效用、物質的效用、形態的效用を創造し増加する産業のみならず、場所的效用、所有的效用、時間的效用を創造し増加する輸送業及び商業も亦、生産業と看做され、更らに、直接消費者に勤務を提供するものも同様に觀られるに至つた。斯くて、生産者、消費者及び商人の對立は、猶ほ實際社會の用語中にも、經濟學上の著作中にも殘存し、而して、生産的及び不生産的なる語は、依然政治的論戰中に

は現れて居つたのであるが、而も、學問的論議からは消滅せんとするの傾向を示した。歴史學派は倫理的規範を承認し、倫理學上の「絶對」に對する經濟學上の原理の從屬を承認するものであつたが、新古典學派に屬する者は往々にして、倫理的判斷を下すは經濟學者の任務に非ずと做すの態度を示した。而も、之れに對し、浪漫主義者及び制度主義者は、富及び生産に關する古典學派的及び新古典學派的定義を以つて、集團的若しくは國民的見地より觀て望ましき幾多の物件を除外するが爲めに、餘りに狹隘であり、又、有害なる一定の貨物を包含するが故に、餘りに廣汎に失するものであると主張して居つた。(Whitaker, op. cit., p. 366.)

## 十二

他方に於いて、農業に於いては收益遞減法則が作用し、製造業に於いては收益遞増法則が作用すると做すの對立も亦次第に緩和せられんとするの傾向を示した。夙に經濟學者等によつて、生産的勞働と不生産的勞働との間に行はるゝ區別に就いて論じ、總べての生産の目的が消費であり、總べての勞働の目的點 (terminus ad quem) が其の産物を購入する者の享樂であつて、是れ等のものが物質的なると非物質的なるを問はずと做したトマス・チャルターズ (Thomas Chalmers) は (Or Political Economy, in connexion with the Moral State and Moral Prospects of Society, 1832, p. 335.) 又、收益遞減法則を拒否して、此の點に於いても、古典經濟學的傳統から離れた。彼れは言ふ、順次、耕作せられなければならぬ新しい土壤がより扱ひ難いものとなるに連れ、同一勞働量は、農具の介在によつて、著しくより有效となることある可きであると。彼れは、直接の手作によつて第一等地から生活資料の一定量を上げることが出来たと同じ勞働が、吾人の現在の農具を以つてすれば、耕作せらるゝに至つた最劣等地から恰も等しき量を上ぐるを得たであらうと述べてゐる。(ibid., pp. 5-6.) ケアンズは恐らく事實上に於ける收益

の減少に強い信念を置いた最後の重要な著者であつたであらうと言はれてゐる、彼れは、事實上機械的及び化學的發明が、自然的作因によつて與へられる低下しつゝある収益率に後れを取ることのなかつたことは、如何なる國の歴史に於いても斷じて看出されなかつた所であると做してゐた。(Some Leading Principles of Political Economy newly Expounded, ed. 1888, p. 119.) ヘンリー・シデウィックは、收益遞減法則が狹義及び廣義に使用せられ得ることを指摘した。彼れに従へば、それは、(一)農業的及び抽出的勞働の生産量は他の事情にして等しければ、人口のあらゆる増加と共に、縱し資本が比例的に増加するとしても、減少する傾向があることを意味するか、若しくは(二)製造業及び國內交易に使用せらるゝ勞働からの増加せる収益にも拘らず、勞働の生産性は概して、他の事情にして等しければ、減少するの傾向があることを意味するかの孰れかであらう。前の傾向が作用し始む可き人口密度は固より後の傾向を誘致す可きものよりも低い。而も、猶ほ、此の法則は其のより、廣き意義に於いてすらも、英國及び最も文明の程度高き歐洲諸國の現狀に適用せらるゝの觀ある可きものと做した。然しながら、シデウィックは、這般の法則が純然たる抽象的のものであり、事實を叙述するものではなくして、傾向を叙述するものであることを明記する。それは、力——其の作用が他の力によつて中和せらるゝ力を叙述する。(The Principles of Political Economy, 1883, pp. 151-152.)

應がて、此の國の學者の間には、或る一定點までは、農業も其の収益を遞増し、而して、原料及び場所の兩者を要する限りに於いて、製造業も、収益遞減を免れざるものと觀るの傾向を生じた。(Alfred and Mary Paley Marshall, The Economics of Industry, 1879, pp. 21-26, 89-90.) トーマスは其の『原理』中に於て、「自然が生産に於いて演ずる役割は収益遞減の法則に一致せしめられ、人間が演ずる役割は収益遞増の法則に従はしめられる」と稱し

た。(Principles of Economics, vol. 1, 1890, p. p. 379.)。彼れは此の書の後版に於いて、收益遞増及び遞減法則の作用が均衡するならば、收益不變の法則(Law of constant return)が作用するものと説いた。(Ibid., 5th. ed., 1907, p. 319.)。

先づ農業耕作に關して認められた收益遞減法則は、今や、唯り土地にのみ適用せらる可きものではなくして、普遍的なるものと看做さるゝに至つた。限界效用價值學說が一般的承認を受くると共に、それは效用遞減法則の別方面と思惟せられた。時代に於いて優先權を有する收益遞減法則は、地位に於いては效用遞減法則に優先權を譲らなければならぬものと認められた。(Ibid., p. 93. n.)。斯くて、農業に就いて眞なるものは、工業、鑛業等の他の産業に就いても等しく眞であり、土地に對して適用せらるゝ所のものは又、労働及び資本にも適用せられる。道具及び装置の連續的増加量は、或る一定點以後に於いては、尙ほ労働者及び生産資料の能率及び經濟を増加するも、而も、それは遞減的割合に於いて之れを増加す可きである。斯くて、増加せらるゝ装置の生産的能率と市場に於いて之れに對して支拂はざるを得ざる價格との間には均衡が保はれなければならぬ。是に於いて乎、這般の法則は單に土地に對する労働若しくは資本の比率に適用せらるゝを得るのみならず、産業装置の大きさ及び企業の規模に關するが如き諸問題にも亦適用し得らるゝことゝなつた。(cf., Philip H. Wicksteed, The Common Sense of Political Economy including a study of the human basis of economic law, 1910, p. 284-285.)。

凡そ一世紀の間、一國の人口政策上及び農業政策上から考察せられて來た收益遞減法則は、ホイットテーカーの指摘せるが如く、茲に、生産諸要素の比例性の問題として、會つてチュルゴオによつて置かれた地位に於いて再現したのである。唯だ、チュルゴオは單に資本と土地の比率を取り扱つたに過ぎなかつたのであるが、近代の經濟學

者は、前述せるが如く、生産過程に於いて結合せられた資本、労働及び土地の比例性其他の問題に之れを適用したのである。(Whitaker, op. cit., p. 402.)。マーシャルに従へば、總べての企業家は、各々其の精力と能力とに應じて、其の現に用ふる各生産要素の相對的能率、否な更らに是れ等要素の孰れかに代位し得可き要素の相對的能率をも知らんとして不斷に努力しつゝあるのである。企業家は或る一要素の或る一定の附加的使用によつて幾許の純産物(net product)を、即ち彼れの全産物の價值に對する純附加が生ぜしめらるゝかを、彼れの爲し得る最善を盡して推測するのである。(Principles, op. cit., 5th. ed., p. 406.)。一般化せられた生産諸要素比例法則は限界生産力學派の分配理論の基礎を成すものである。各協力要素の價格が該要素の限界産物に等しいならば、斯くて協力諸要素の所有者に割り當てらるゝ諸配分の總額は全産物に等しかる可きである。然しながら、斯くの如きは實際には充分に行はれない一定の單純化せられた條件の下に於いてのみ唯り眞なるものである。限界生産力說と關聯せる最も傑出せる名はジョン・ベーツ・クラークの其れであるが、彼れの理論は主として純乎たる理論的のものであつて、之れを特徴付ける底の抽象が果して効果あるものであるか如何かと往々にして疑問とせられた。

マーシャルに據れば、或る一定種の財貨生産の規模に於ける増大から生ずる經濟は、「外部的經濟」と「内部的經濟」とに分たれる。前者は其の産業の一般的發達に依存するものであつて、其の産業に於けるあらゆる企業の享有し得可き經濟であり、後者は之れに従事する各箇企業の資源及び是れ等のものゝ經營能率に依存するものである。(Ibid., p. 266.)。一企業の遞減的費用は各箇企業若しくは全體としての其の産業の大きさの函數である。幾多の場合に於いて、機械的過程の最大なる能率は一企業が一定の規模に到達せる際に確保せられて、早晚、一企業の規模を擴張するによつて、生産諸力の能率を増加することが不可能となる。一企業の擴大が一定點即ち所謂最適度點



(Optimum point) に到達した後には、他の事情にして等しとしたならば、其の限界費用は増加する傾向がある。而して、其の限界費用が価格と相等しきに至る時は、其の大きさに關して均衡の地位が到達せられる。然しながら、斯くの如きは生産方法若しくは組織の一定不變を條件とするものであつて、管理行為の委任若しくは其の他複雑なる經營及び指揮の組織は這箇最大限の到達を延期し、種々なる事情に依つて屢々大なる企業の結合が成功しつゝあることが認められる。大規模生産の經濟と競争的重複の不經濟とが依然として確實なるの時、同一市場に於ける競争的企業統合の經濟が明かに看出される。大規模生産の外部的經濟は又産業の地理的集中及び地方化を招來する。

國家目的達成の爲めに經濟に對する政治的統制が行はれ、生産力擴充、戦力增強が至上目標として絶叫せらるゝの時、收益の遞減的及び遞増的傾向並びに諸生産要素の比例性の問題は、再び政治經濟の見地よりするより、宏大な規模に於いて考察せられなければならない。而して、如何なる方面に於いて生産は強化促進せられ、又如何なる方面に於いてそれは阻止壓縮せらる可きかの問題は、新たな意義に於いて、生産的及び不生産的の問題を懸らしむるものとも稱するを得可きであらう。斯く觀じ來れば、生産的及び不生産的の區別は、必ずしも經濟學說史上の一遺産としてのみ唯り意義あるものではないであらう。

## 「エーデ」(Aides) に就いて

——フランス舊制度下の間接税研究——

下 田 博

### 目 次

- 一 緒言——本稿の課題
- 二 「エーデ」(Aides) の起原と變遷——封建制度と「エーデ」——路易七世と「エーデ」——フィリップ・オーギュストと「エーデ・ツ・ロスト」——聖路易と「エーデ」——十字軍と「エーデ」——フィリップ・ル・ベルと「エーデ」
- 三 一般商品に對する間接税としての「エーデ」——一三五五年のジャン二世の法令に現れたる「エーデ」の設定理由・課税對象・徵税方法・使途・課税期間——第十五世紀以後における「エーデ」の税質の變化——葡萄酒及び諸他の飲料消費税としての「エーデ」——第十六世紀における經濟的發展と王税制の確立——金融機關の未發達——「エーデ」を擔保とする公債の發行と「エーデ」の増徴
- 四 宗教戦争と財政逼迫——シユリリ公の財政整理——コンシニイの苛税——リシユリウの財政的手腕——マザランとフーケー——コルベールの財政立直し——路易十四世治世の後半における財政窮乏と諸税増徴